

西湖博覧会における南洋勸業会の「記憶」

小羽田 誠 治

はじめに

第1節 西湖博覧会における南洋勸業会に関する言説

1. 「批判的継承」説に対する批判
2. 南洋勸業会の「記憶」

第2節 西湖博覧会の実態

1. 西湖博覧会開催に至るまで
2. 地方性の具体的事例

結論

はじめに

1929年6月6日から10月20日までの約4ヶ月間、浙江省杭州にて「西湖博覧会」と呼ばれる博覧会が開催された。すでに指摘されているように¹、西湖博覧会は1924年に立案されていたのだが、戦乱により挫折、1928年の北伐の完成を待ってようやく実現されることとなった。そういう点では、戦乱（混乱）の治まりと中国の再統一という二重の意味で、1929年の西湖博覧会の開催は象徴的な出来事であったといえよう。

周知のとおり、中国における全国規模の博覧会は、清朝末期の1910年の南洋勸業会を以て嚆矢とする。そして、その直後の清朝の崩壊やそれに続く内乱などもあって、このような博覧会はしばらく行われることもなく、西湖博覧会は中国史において実に二回目の博覧会の試みとなった。そこで、西湖博覧会の組織や展示法といった事実関係やそれに対する日本の動向については、柴田哲雄の研究により基本的な事柄は明らかにされているのだが、本稿ではこれに別の視点を加えて論じたい。即ち、中国の再統一という背景のもとで開催された西湖博覧会が、中国史上初の試みとなった清末の南洋勸業会をどのように位置づけているのか、という問題を考察し、近代中国における博覧会の意義に関する一つの側面を明らかにしようというのが本稿のテーマである。

もちろん、この問題についても考察がないわけではなく、柴田哲雄は、西湖博覧会の開催に及んで、南洋勸業会を批判したいくつかの言説をとりあげ、「南洋勸業会を批判的に継承した」と述べ

¹ 例えば、柴田哲雄「中華民国期：西湖博覧会」、柴田哲雄・やまだあつし編著『中国と博覧会—中国2010年上海万国博覧会に至る道—』、成文堂、2010年3月を参照。

ている²。しかしながら、南洋勸業会の問題点の一部を指摘したものや、南洋勸業会を批判する一部の言説をとりあげるだけで、上のように簡潔にまとめてしまうのはいかにも表層的であるし、両会の関係を正しく捉えることはできないだろう。そこで、第1節ではまずこの見解について検討を加え、西湖博覧会の開催において南洋勸業会がどのように「記憶」されていたかを明らかにし、その上で第2節ではそれがいかなる要因によるものかを考察する、という構成をとることとする。

ちなみに、ここで言う「記憶」とは、単なる歴史的事実としての記憶にとどまらず、それがある社会にとって、その社会の現在を形成する上で、ある程度共通の大きな価値を持ち、語り継がれているものを指している。本稿では即ち、中国において数少ない経験であり、それゆえに人々の「記憶」として形成されやすいと思われる博覧会をとりあげて、その事実を究明するとともに、中国社会の構造の一端を垣間見ようとするものである。

第1節 西湖博覧会における南洋勸業会に関する言説

本節では、1929年に西湖博覧会を開催するにあたって、その約20年前に開催された南洋勸業会がどのように語られ、位置づけられていたかを考察する。初めに、それについて論じた柴田哲雄の「批判的継承」説をとりあげてこれに考察を加え、その後、西湖博覧会で南洋勸業会について語られたいくつかの言説をとりあげて、当時の人々の南洋勸業会に対する「記憶」について考察する。

1. 「批判的継承」説に対する批判

まず、西湖博覧会が「南洋勸業会を批判的に継承した」とする柴田哲雄の第一の論拠ともなっている『西湖博覧会指南』の湖備「党化的西湖博覧会」をとりあげよう。そこでは、西湖博覧会の目的について、以下のように述べられている³。

我々は、西湖博覧会の主旨が国産品の提唱にあると人々が語るのを耳にするが、しかしその「国産品の提唱」とは、通常の商品展覧会のように一種の平凡な方式で、単純に国産品を提唱しさえすれば良いのではない、ということも知らなければならない。それは一方では社会における外国製品を歓迎する心理を排除し、一方では製造者に国産品を改良する方法を指導するものなのである。……陳列する物品は、南洋勸業会の京畿館が乾隆帝の象牙の蓆を持ち出してそこで誇示するようなものではなく、またパナマ博覧会で世界各国の骨董品を集めて人々の海外の奇聞を供するようなものでもない。そこでは本国の商品、全国民の衣食住に関わる日用品を陳列するのである。

ここでは「国産品」の重要性を唱えるとともに、中でも「日用品」の重要性を強調するために、

² 柴田哲雄 (2010.3)。

³ 『中国早期博覧会資料彙編』4、220頁、「我們聽到人人說的西湖博覧會的宗旨是提倡國貨、但是我們要知道他的提倡國貨不是同普通的國貨展覧會一樣、用一種尋常的方式、單純的提倡國貨、就能完事、他一方面是剷除社會上歡迎外貨的心理、一方面是指導製造家改良國貨的方法。……陳列的物品、不像南洋勸業會的京畿館拿着乾隆大皇帝的象牙御蓆在那裏誇耀的、也不是像巴拿馬博覧會搜羅了世界各國的骨董、供人家做海外奇譚的。他是陳列着本國的出產、關於全國人民衣食住行的日用物品。」

南洋勸業会の問題点を指摘しているのだが、これをもって「南洋勸業会を批判的に継承した」とするのは問題があるように思われる。というのは、この文脈では批判されるべきは「京畿館」であり、南洋勸業会全体ではないからである。事実、理念的に言えば、南洋勸業会もまた「日用品」の重要性を強調していた——実態としてそれが不十分であったこともまた事実だが——のであり⁴、西湖博覧会はむしろその方針をそのまま継承したと言えるのである。もっとも、実態として見るのであれば、西湖博覧会にも同様の問題を抱えていたのであるが、これについては後述する。

次に、第二の論拠である『西湖博覧会総報告書』の陳德徴「対西湖博覧会的感想」を見てみよう⁵。

かつての南洋勸業会は、国内の博覧会の歴史の中で、規模は最大であり、各種の専門館は40所あまり、面積は700畝あまりに及び、予算は150万以上に達した。しかし、多くの経費をかけたにもかかわらず、その効果が結局のところどうだったかを我々が考察するに、南洋勸業会を開催する前と開催した後を比較しても、国産品の商工業の進歩は依然として微々たるものであったと言える。その原因はもちろん一つではないが、教育事業が当時特別に注意されなかったのが、おそらくその最大の原因であろう。現在の西湖博覧会では、我々は成功の道を見つけたと言えるだろう。

この考察は確かに南洋勸業会に対する批判ではあるが、柴田哲雄が引用した前半部は博覧会開催の「結果」に対する批判であり、となるとこれを「批判的に継承する」ことは難しい。とすれば、重要な指摘はむしろ氏の触れていない後半部の「教育」という点であるが、南洋勸業会について触れておくと、南洋勸業会では「教育」は十分に強調され、むしろそれがゆえに「娯楽」を求める観覧者との乖離を生み出したほどであったのである⁶。確かに、西湖博覧会で「教育」がその目的として掲げられていたことは間違いないが、それが南洋勸業会の実態をふまえた上で、その改良点として考えられていたかは疑問である。

これら他にも西湖博覧会が南洋勸業会より優れているとする言説はもちろんあるのだが、その中で最も簡明にこれを指摘したものは、唐生智によるものであろう。彼は博覧会場にて以下のような演説を行っている⁷。

民国成立以来、盛大なる博覧会が挙行されてきたが、貴会は実に最も優れたものである。以前、

⁴ 小羽田誠治「南洋勸業会の実態と清末における近代化政策の限界」、『集刊東洋学』104、2010年10月。

⁵ 『中国早期博覧会資料彙編』7、615頁、「過去南洋勸業會、在國內賽會歷史中、規模要算最大、各業專館有四十餘所、佔地七百餘畝、用款達一百五十餘萬、但是費了如許經費、其效果究屬如何、我們可加一攷察、自從未開南洋勸業會以前、和已開南洋勸業會以後比較起來、國貨工商業的進歩、可說仍舊微乎其微、牠的原因、固非一端、教育事業在當時並不是特別的注意、恐怕也是其中最大的原因之一吧、現在的西湖博覧會、我們可以說是找着了成功之路了」。

⁶ 小羽田誠治(2010.10)及び小羽田誠治「南洋勸業会はなぜ開催されたのか——清末新政の特質についての一考察——」、『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』20、2011年3月。

⁷ 『中国早期博覧会資料彙編』7、416～417頁、「軍事參議院院長唐生智先生講演(9月6日)」、「民國成立以來、舉行盛大的博覧會、貴會實是首屈一指、當前清末年、端午橋不曾辦過南洋勸業會嗎、不及現在的西湖博覧會、當時不但設備不全、會場的風景、那裏趕得上西湖的優美、并且是偏於商業化、與貴會依科學之組織、爲精美的設備、實在是有天淵之別」。

清末に端午橋（端方）が南洋勸業会を開催したのではないか。だが、それは現在の西湖博覧会に及ばない。当時は設備が不完全である上に、会場の風景も、どうして西湖の優美さに比肩できようか。それに、南洋勸業会は商業化に偏っており、貴会の科学的組織に基づき、精美な設備を有するのとは、実に天と地の差があるのである。

西湖博覧会は、設備の良さ、西湖という土地の優美さ、科学に基づいた組織、という3点において、南洋勸業会をしのいでいる、というのである。実際、これらの点は西湖博覧会の意義として度々強調されていることである。しかし、だからと言って、それが南洋勸業会を「批判的に継承した」と言えるだろうか。この言説はあくまで両会を単純に比較したものであり、南洋勸業会以外の博覧会のことにも触れているように、いかなる「継承」関係も示していない。もっとも、唐生智は西湖博覧会の運営に関わっていたわけではないので、南洋勸業会との関係について特に深く認識していないのは当然とも言えるが、それだけにこれは一般的な認識として理解しておくべきものだと思う。

つまり、これまでのところ南洋勸業会に対する不満点はいくつか挙げられているものの、決して西湖博覧会がこれを「批判的に継承する」というようなものではなかったことがわかるだろう。だとすれば、西湖博覧会において、これに先立って開催された南洋勸業会はどのように位置づけられていたのか、さらなる史料をもとに考察する必要がある。

2. 南洋勸業会の「記憶」

では、原点に立ち返る意味も含めて、1928年に浙江省政府建設庁が西湖博覧会開催を提案した議案書を見てみよう。そこではごく簡単ながら博覧会の歴史に触れ、以下のように述べている⁸。

……博覧会の創設は、1798年フランスのナポレオンに始まった。その後各国がこぞって開催し、模倣して繰り返すうちに、催しはしだいに豪華になった。我が国では清末期に南洋勸業会を一度開催したことがあるが、今に至るまで長らく後に続くものはない。……そこで自ら博覧会を開催し、各省の先導となり、今後の救済策を図る。これが西湖博覧会を開催すべき理由の第二である。

一見してわかる通り、当局は南洋勸業会を、18世紀末に始まる世界的な博覧会ブームにあって、過去の中国においてこれと同列に論じ得る唯一の博覧会と認識していたようである。しかしながら、その南洋勸業会の内容、成否、そして今回の西湖博覧会との関係については一切触れられておらず、いかなる意味においても、南洋勸業会が中国における博覧会の「記憶」として深く印象づけられていたと考えるには、甚だ心許ないと言える。

また、明らかに全国規模の博覧会を語っている文脈にもかかわらず、後半部では浙江省が「各省の先導となり」と言っているように、地方性についてうかがわせるような記述も注意を引くものであるが、この点については次節で詳述する。

⁸ 『中国早期博覧会資料彙編』4、11～12頁、『西湖博覧会章則彙編』、『籌設西湖博覧会議案』、『博覧會之創設、自一七九八年法國拿破崙始、嗣後各國群起、仿行復踵、事增華彙爲大觀、吾國於前清末季會開南洋勸業會一次、迄今多年、絶無嗣響……亟應自開博覧會、以爲各省之先導、圖事後之挽救、此西湖博覧會應設立之理由二也』。

次に、中央党部代表の朱家驊という人物による開会日の訓辞を見てみよう⁹。

……我が国が行った大規模な博覧会としては、ただ、以前の宣統2年に南京で行われた南洋勸業会があるのみで、民国以後は今回が第一回目である。今回は各地の物産をできる限り集め、陳列し、民衆の観覧のために供するものである。

後半の「各地の物産を……」という事柄は、南洋勸業会でも当然行われていたことであるため、特に両博覧会の性質の違いを述べたものでないことは明らかである。やはりここでも同様に、南洋勸業会は西湖博覧会にとって、過去の事実として以上の「記憶」とはなっていないことがわかる。

同じく開会日に祝辞を述べた賑災委員会主席の許世英のように、南洋勸業会が「規模は広大であり、国民は皆それを称賛した」と、逆にこれを称賛するような言説もあるが¹⁰、これは彼が当時欧米各国を歴訪していたため参観することができず、そのために多少美化された点があると考えべきだろうか。ただ、いずれにせよそれほど詳細に語られているわけではない。

それに、南洋勸業会を必ずしも西湖博覧会の直接の前身とは考えないどころか、20世紀以来中国各地で開催されていた地方博覧会と同列に扱うような言説もいくつかある。まずは教育部次長の馬叙倫による講演を見てみよう¹¹。

我々中国の国内で開催された博覧会については、最初なのが光緒32（1906）年の天津の第一次勸業展覧会であり、宣統2（1910）年の南洋勸業会、民国5（1916）年の農商部の国貨展覧会、民国17（1928）年の中華国貨展覧会と各省各地の歴年にわたる博覧会があり、統計を取れば、30回は下らない。このような気運の高まりは近代商工業の運動において特有の現象と言えるだろう。

次に、魏頌唐という人物による回想録には、以下のように述べられている¹²。

清朝末期に、何度か各国の国際博覧会に参加したが、政府は注意を払っておらず、国交上の道具としてしか見ていなかったの、見るべき成果はなかった。その後、国民にやや感ずるところがあり、ようやく博覧会の意義の重要性に気づいた。そして、武漢勸業奨進会、南洋勸業会、及び民国には去年の上海国貨展覧会、武漢国貨展覧会、河北国貨展覧会が開催された。我が国の国内博覧会の事業は、雨後の筍のごとく萌芽し、起こった。

ここでは、概ね近代化に邁進する中国の必然的現象として肯定的に語られ、それゆえ逆に言えば、

⁹ 『中国早期博覧会資料彙編』5、316頁、「我國舉行大規模的博覧會、祇從前宣統二年在南京有過了一次南洋勸業會、光復以後、這實在第一次、這次把各地的物產盡量的搜集起來、陳列起來、供民衆的觀覽」。

¹⁰ 『中国早期博覧会資料彙編』5、320頁、「余於前清宣統二年、赴歐美各國考察司法、……我國往歲南洋勸業會設於南京、規模宏大、邦人咸稱道之、惜未一覽其盛」。

¹¹ 『中国早期博覧会資料彙編』7、480頁、「教育部次長馬叙倫先生講演（9月17日）」、「至於我們中國國內所辦的博覧會、最先是前清光緒三十二年的天津第一次勸業展覧會、宣統二年的南洋勸業會、民國五年的農商部國貨展覧會、十七年的中華國貨展覧會和各省各地歷年所辦的博覧會、統計起來、不下三十個、這種風起雲湧的盛況要算是近代工商業運動當中的特有現象」。

¹² 『中国早期博覧会資料彙編』7、616頁、「西湖博覧會之回想 魏頌唐」、「有清末葉、雖曾一再參加各國國際博覧會、顧政府未知注意、不過視為國交上應酬之工具、是以無成績可言、其後國人稍有感覺、漸知賽會意義之重要、而有武漢勸業奨進會、南洋勸業會、以及民國以來去年之上海國貨展覧會、武漢國貨展覧會、河北國貨展覧會、吾國國內賽會事業、如雨後春筍、萌芽森然、應時而生」。

取り立てて言うべき偉業としての「記憶」も失政としての「記憶」も存在していないと言えよう。

もちろん、南洋勸業会にいくらか批判的な視点を持つ言説もあるのだが、戴季陶の演説に至っては、西湖博覧会に対してさえも不満を述べており、やや特異な立場をとる¹³。

西湖博覧会では、各地から品物を集めることができ、内容は充実し、確かに努力が実ったと言えるだろう。しかし、文化・産業の実際から再び観察するに、南洋勸業会から現在に至るまで20年あまりになるが、この20年のうちに中国の文化と産業の進歩はどの程度であったか、おそらく誰も自慢できまい。……この原因は明らかである。即ち、科学は発達せず、教育は進歩せず、一切の文化や産業の衰退をもたらしたのである。その上、内戦が頻発し政治が振るわなかったことは、この最大の原因である。西湖博覧会の成果は、外国の博覧会から見れば全く良くない。しかしその良くないところは博覧会そのものにあるのではなく、中国の文化や産業にある。

ここでは博覧会の成否を博覧会自体ではなく政治的・社会的背景に求めており、そういう意味では、南洋勸業会にせよ西湖博覧会にせよ、批判的に語られているとは言えないだろう。ただ、それだけに南洋勸業会という経験は時間的な区切りとして以上の意義は持ち得ていないように思われる。

以上見てきたように、清末に開催された南洋勸業会は、中国史上初の全国規模の近代的博覧会であったにもかかわらず、その約20年後の民国期の人々にとって、深く刻み込まれた「記憶」とはなっていなかったようである。では、それはいかなる理由によるものだろうか。一つには、中華民国は清朝を否定して建てた国家である以上、その政策を否定することが至上命題となっていた、ということが考えられるだろう。だが、それにしても、西湖博覧会の「批判的継承説」が疑わしかったように、また必ずしも南洋勸業会をただ批判する言説ばかりではなかったように、国家の理念としての理由のみからでは説明できない。そこで次節では、一見「全国規模」であるがゆえに中国の「総体」として捉えてしまいがちな西湖博覧会——おそらくは南洋勸業会も——について、その「地方性」という点に着目し、考察することにより、両会の関係を理解するための一助としたい。

第2節 西湖博覧会の実態

西湖博覧会において、南洋勸業会は必ずしも重要な「記憶」となっていなかったが、その理由を考えるためには、西湖博覧会の実態について知る必要があるだろう。結論から言えば、西湖博覧会は全国規模の博覧会ではあったが、実はその実態は必ずしも標榜されているような規模・組織ではなく、むしろ「地方性」の強いものであり、そのために南洋勸業会が共通の「記憶」となりえな

¹³ 『中国早期博覧会資料彙編』7、433頁、「本會歡宴戴院長季陶之演說詞（8月1日）」、「西湖博覧會竟能多方征集、内容充實、確是一種努力的成功、但是我們再從文化產業的實際方面觀察、自從南洋勸業會到現在、已經二十多年了、這二十年當中、中國文化和產業進歩了多少、怕是誰也不敢恭維罷、……這原因很顯然的、是由於科學不發達、教育不進歩、遂至一切文化產業衰落、而內戰頻仍、政治不良、尤為最大之原因、……西湖博覧會的表现、拿外國的博覧會來說、確乎不好、但是這不好的地方、不是在博覧會的自身、而是在中國的文化產業」。

かった、あるいはその事実が南洋勸業会を共通の「記憶」として語ることを妨げていた、と考えられるのである。本節では、従来大まかにしか触れられてこなかった博覧会開催の経緯について、関連する史料を紹介して事実関係を明らかにした上で、そこから半ば必然的にもたらされる「地方性」という特徴を、別の史料で補いながら明らかにする。

1. 西湖博覧会開催に至るまで

西湖博覧会が、南洋勸業会ほど周到な準備を経ていなかったことは、第一にその準備期間を見ても明らかである。南洋勸業会の企画が光緒 34 (1908) 年 11 月の端方の上奏に始まり、宣統 2 (1910) 年 6 月の開催までおよそ 1 年半の準備期間を経ていた¹⁴ のに対し、西湖博覧会は民国 13 (1924) 年に立案こそあったものの、実質的に計画が実行されたのは民国 17 (1928) 年 10 月のことであり、翌年 6 月の開催まで半年あまりの準備期間しかなかった。しかも、従来指摘されてこなかったのだが、以下に見るように、この準備期間中にも様々な混乱があったようである。まず、そもそもの発端から見てみよう¹⁵。

わが中国が西湖博覧会の開催を構想したのは、民国 13 (1924) 年 7 月、浙江軍事善後督辦盧永祥と省長張載揚の時代であり、具体的な計画を練り、籌備主任を選出して、150 万元の予算を組み、公債を発行し、加えて塩斤税 5 厘を公債基金の担保とする予定であった。しかし当時の政局は安定しておらず、世間では軍閥が口実を設けて資金を得て、陰で軍事費に充てようとしているのではないかと、疑うものがあり、実現できなかった。

計画当初の 150 万元というのは、南洋勸業会の 70 万元¹⁶ を大きく超えるものであったが、結局実現を見なかった。また実現されなかった理由であるが、戦乱中であったことと同時に、軍閥に対する不信感が挙げられている点は特筆すべきであろう。つまり、西湖博覧会の立案は地方軍閥の政策——とその社会的支持の欠如——から始まったのである。

その後、先述のように、北伐が完成した民国 17 (1928) 年 10 月に再び提案があり、籌備委員会が発足したのだが、その組織は総務・場務・徴集の 3 部門を置くに過ぎない簡素なものであった¹⁷。そして、その当時構想されていた展示品の収集・陳列方法及び予算もまた驚くほど杜撰なもので、それは以下のごとくであった¹⁸。

¹⁴ 小羽田誠治 (2010.10) などを参照。

¹⁵ 『中国早期博覧会資料彙編』5、「第一章 籌備経過」、265 頁、「吾華擬開西湖博覧會、在民國十三年七月、浙江軍事善後督辦盧永祥、省長張載揚時代、曾有草窺具體之計劃、並經遴派籌備主任、預算經費需一百五十萬元、擬發行公債、加鹽斤稅五釐爲公債基金擔保品、以時局不靖、社會懷疑、恐爲軍閥藉端醜資、陰備軍實之作用、未得實現」。

¹⁶ 例えば、山田美香「清朝末期：万国博覧会と南洋勸業会」、柴田哲雄・やまだあつし編著『中国と博覧会——中国 2010 年上海万国博覧会に至る道——』、成文堂、2010 年 3 月を参照。

¹⁷ 『中国早期博覧会資料彙編』5、「第一章 籌備経過」、265 頁、「現十七年秋、革命大軍北伐告成、中夏底定、浙江省政府、爲紀念統一、獎進國產起見、爰有籌辦西湖博覧會之提議、迨十月由建設廳擬具籌備西湖博覧會議案、提經省政府委員會議決通過、同月十五日、設立辦事處於建設廳、二十七日籌備委員會開成立會、由省政府聘定委員、並以建設廳長爲籌備委員會主席、分設總務、場務、徴集三股、釐訂章程、規劃會場、籌徵出品、稍稍集事、漸有可觀」。

¹⁸ 同上、「維時中華國貨展覽會、方開會於滬濱、派員接洽、允於閉會後將該會陳列物品、移交西湖博覧會爲基

ただ、当時は中華国貨展覧会が上海において開催されており、人員を派遣して相談したところ、閉会後に当会の陳列品を西湖博覧会に移送して基本陳列品とする、という合意を得た。一方で本省（浙江省——筆者註）の各市県に対して特産品の徴集を呼びかけ、それらは西湖にある公私の各商店・祠堂・家屋に分類して陳列することとする。民国18（1929）年2月1日から5月末までを開会期間とするが、これは西湖が名勝地区であることを利用し、春に旅行客が集まるときに観覧する機会を設けようとするものである。規模は必ずしも大きくするつもりはないので、設備は新たに整える必要もなく、当初の経費はわずかに15万元のみであり、実質的には一種の展覧会という性質のものである。

まずは展示品を中華国貨展覧会から借りてくることを基本としていたことが注目に値するが、それに加えて収集するものもあくまで浙江省の中からとし、設備の簡素さも当初の予算の10分の1であるという財政状況と相まって、到底博覧会と呼べる代物ではなかったことがわかる。

しかし、とあるきっかけから西湖博覧会は規模の拡大を目指すこととなる。その顛末は以下のとおりである¹⁹。

その後、上海の中華国貨展覧会の陳列品は、すべてを武漢展覧会に移送することとなり、本会が元々定めていた基本陳列品はたちまち得ることができなくなった。そこで他から徴集せざるを得なくなり、会場の布置も委員会の何度かの決議を経て、建築物を増加させ、開催時間も延長し、経費も18万元あまりにまで増加することとなり、籌備委員もまた600人あまりにまで増員した。このようにして国内の商工業の専門家、技術者をあまねく招聘することとなった。つまり、当初あてにしていた展示品が得られなくなったことにより、それに代わる出品物の収集のために規模を拡大することになったのである。

こうして省レベルの展覧会から一步踏み出した西湖博覧会は、その先はいわばなし崩し的に規模拡大を続け、予算は49万元あまりまで増加し、南洋華僑にも出品の呼びかけを行い、組織も宣伝・運輸・警衛など11部門にまで増えることとなり、会場は8つの陳列館と2つの陳列所を備えるまでになったのである²⁰。

西湖博覧会開催中の状況を見るに、その評価についてはすでにとりあげたものも含めて諸説あるのだが、客観的なデータとして以下のいくつかの点でまとめられているので、見ておこう²¹。

本陳列品、一面分向本省各市縣徴集特種產品、就裏西湖原有公私各莊祠屋宇、分類陳列、原定於十八年二月一日至五月底爲開會期間、蓋欲利用西湖名勝之區、及春日游客接踵之時、藉作觀摩之機會、因是規模並不求宏大、設備亦不事鋪張、原定經費、本僅十五萬元、實際上不過爲一種展覧會之性質。

¹⁹ 同上、「旋以上海中華國貨展覧會陳列品、全數移送武漢展覧會、本會原定之基本陳列品、未能咄嗟立辦、不得不另行徴集、會場佈置、又經委員會迭次決議、增加建築、時間範圍、同時擴大、籌備經費、遂增至十八萬餘元、籌備委員、亦復增多至六百餘人、一時國內工商專家、技術人材、延聘殆徧」。

²⁰ 同上、265～266頁、「開會日期、亦經一再展延、最後乃定爲十八年六月六日開幕、十月十日閉幕、籌備經費、又復增至四十九萬餘元、並以規模既經拓展、徵品勢須廣博、遂派員分赴各處、充量採集、計有東北、東南、長江三路、並遠及南洋各埠、籌備會執行部之組織、亦遂擴充爲財務、事務、徴集、場務、宣傳、運輸、警衛、游藝、交際、工務、藝術等十一股、設總務處以統轄之、另設工務處專司工程之設計建築諸事項、並於上海設駐滬辦事處、南京設通訊處、掌理宣傳及徵品事宜、陸續加委職員至三百餘人、徵到中外出品十餘萬件、分八館二所陳列、於是轟動一時堂皇富麗之西湖博覧會、至此乃得如期開幕」。

²¹ 同上、「會期至十月初旬、正值涼秋、遊人益形踴躍、因詢衆議、延長十日至十月二十日始行截止展覽、總計

会期は十月初旬までであったが、ちょうど涼秋の季節に当たり、旅行客が益々多くなっている中で、互いに議論した結果、10日間延長して10月20日まで開くこととした。総計すると、会期は128日間になり、参観者は2,000万人あまりに達し、その費用は開会から閉幕までと入場券や賞金などを合わせて、72万円に上り、準備期間の費用と合計すると、122万円あまりとなった。

参観者数については、計上するのが困難なため疑問の余地があるが、それでも会期を延長することになったことなどは、一応の成功を見たと言えるのだろう。しかし、展示の内実はどうだったかという、報告書は一転して否定的な評価を下している²²。

およそ一省の財力でもって、中国内外から展示品を収集するような博覧会を実施しようとする一方で、その費用は盧・張氏の組んだ当初の予算にも及ばず、その点は国民に許しを請わなくてはならないかもしれない。そして、設備は完備していたとは言えず、展示品は広くから収集できていたとは言えず、博覧会が国家や社会に対して貢献するところ、国家や社会が博覧会に望むところを、どれも十全に果たすことができたとは言えない。

全体としての否定的な論調もさることながら、ここで注目すべきは、開催の主体が「一省」の力であったことを明示し、その上で展示品の収集も広く行われなかったことを認めている点であろう。これについては次項で具体的に見るが、中華国貨展覧会の展示品を流用する当初の予定を変更して、急遽各地に出品の呼びかけを行ったことが、あまり功を奏していなかったことがわかる。

総じて、西湖博覧会はそれなりの集客力はあったのかもしれないが、運営する側の行ったことについては、大いに課題の残るものであったようである。報告書にはそのような結果になった原因についても考察しており、(1) 計画性のなさ、(2) 専任人員の欠乏、(3) 予算の不安定さ、という3点を挙げているのだが、考察の当否はともかくとして、前二者の論点は本稿のテーマにおいて重要であるので、順に詳しくとりあげていく。まずは「計画性のなさ」という点についてである²³。

およそ今回の博覧会は徐々に設備を整えていくという類のものであり、その事情はすでに述べたところであるが、すべての計画が、準備を始めた当初においては想定されていなかったものが多い。仮に想定されていたとしても、準備を始めたときには予算に制限があり、準備手順に組み込まれていなかった。後になって開会時期は幾度も延期され、規模はしだいに拡大し、そのため細かい事柄は、直面するたびに慌てふためき、期限が迫っているので、すべての設備はただ簡素なものにとどまり、精緻さを求める暇もなかった。建築作業は往々にして着工と設計

開會一百二十八日、參觀人數達二千餘萬、其用費自開會以至閉幕及發給遊券獎金、共計七十二萬餘元、合籌備期間用費、總共為一百二十二萬餘元。

²² 同上、「夫以一省之財力、舉辦徵品徧及中外之博覽會、而其所費尚未及盧、張兩氏之所預期、此節容或可求諒於國人、而設備之未臻完善、徵品之不獲普徧、與博覽會之所貢獻於國家社會、及國家社會之所屬望於博覽會者、均未能十分圓滿。

²³ 同上、「一日無整個之計劃也、夫本屆博覽會之為一種逐漸展進設施、其事態已如上述、因是一切計劃、在開始籌備、每多未能計及、縱或見到、而為開始籌備時預算所限、未列入籌備程序、迨其後開會一再展期、規模漸次擴大、於是枝枝節節、臨事張皇、期限既促、一切設備、惟務簡捷、不遑求精、工程建築、往往開工與設計、同時進行、絕無從容考慮之餘地、徵集出品、雖分發信派員及組織分會辦理、但以時間過迫、或則草率從事、未及菁華、或則陳列乖舛、未標新穎、參觀人士、遂不免有感其美中不足而缺望者」。

が同時に進行しており、十分に考慮する余地は全くなかった。出品物を収集するには、人員を分けて派遣し、分会などの組織を作ったが、時間が逼迫していたため、いい加減に事を済ませて充分でなかったり、陳列がおかしくて新しさに欠けていたりした。その結果、参観者が画竜点睛を欠く印象を抱いて失望するのを免れなかった。

この点は、これまで指摘してきた事柄について、さらに具体的な描写を加えて説明したものだと言えるが、建築・出品などの面において、当初の計画があくまで地方に根付いた範囲を超えるものではなかったために陥った問題であったのだろう。西湖博覧会は、元来——後に結果的にそうなったにせよ——精美さや新しさを前面に掲げるようなものとして構想されていなかったのである。

次に、「専任人員の欠乏」という点であるが、この点はこれまでに触れられてこなかったということにおも注目し値する²⁴。

博覧会は東西の各国で慶祝の大典があるごとに繰り返されてきたものであり、本来珍しいものではない。しかし、我が国では実質的に初めての催しであり、その方法は引き継ぐものがないため、体制もまた踏襲すべきものをもたない。たとえ自ら専門家を招聘し、懸命に主宰しても、全力を傾けることができない恐れがある。そして、各機関の兼任委員はその間を動き回っているため、議題を論じるのも迅速でない。たとえ学歴が特別に優れていても、一人の精神は一日のうちにその本職ですでに疲弊している。兼任する職務にまで余裕をもって展開できるためには、傑出した才能と力量を持っている人でなければ不可能だろう。そうでなければ、多くの人が仕事を引き延ばして責任を逃れるようなことは、必然的に起こることである。今回の博覧会においては、準備から開会に至るまで、仕事に携わった職員はほとんどすべて兼職でないものはなかった。

ここにもまた、一省レベルで企画された博覧会がその許容量を超えて規模を拡大したことに対する綻びが表れていると言えよう。加えて、南洋勸業会をはじめとする過去の経験から学ぶ術を持っていなかったことが示されているのも看過できまい。即ち、西湖博覧会においては、地方の枠を超えた「中国の博覧会」という視点から系統だった体制づくりがなされる環境にはなかったのである。

以上からわかるように、最終的には中国史上第二の全国規模の博覧会を標榜して開催された西湖博覧会であったが、その発端から内実に至るまでの組織の動向を俯瞰するに、決して当初からそのための準備が行われていたわけではないどころか、わずか半年あまりという期間のうちに劇的に変化しながら成立に至ったのである。

2. 地方性の具体的事例

前項で見てきたように、西湖博覧会は当初は比較的小規模な展覧会という程度のものであるとして企画

²⁴ 同上、「二曰専任之人員太尠也、博覽會在東西各國、每遇慶祝大典、類多行之、本爲數見不鮮之事、然在吾國、實爲艱舉、辦法既無可因仍、體制復未繇沿襲、即使體聘專家、專心主持、猶虞精力不克貫注、乃以各機關兼任人員進退其間、微論事非夙習、即使學歷特優、而一人精神、一日之間、既已盡瘁於其本職、而尚能從容展布於其所兼任之職務者、自非具兼人之才軼羣之量者鮮克有濟、則大多數之必敷衍塞責、蓋爲情勢之所必至、此次博覽會、自籌備以迄開會、在事各職員、殆無一而非兼職」。

されたが、予定していた展示品が得られなくなったことにより、やむなく規模を拡大したものであった。つまり、西湖博覧会は地方性の強いものとして発足した。後に全国規模に拡大することになってからも、設備や人員の不備・不足という面から、その名残は随所に見られたこともすでに確認したのだが、本項では実際に展示されたものについてもやはり地方性を免れなかったことを、いくつか具体例を挙げつつ見ていくこととする。

西湖博覧会には、「博物館」が設置されていたが、そこでの展示物について、報告書は以下のよう
に述べている²⁵。

本館の出品を調査するに、その大別は動物・植物・鉱物の三種類であった。出品者は主として大体3つの機関からであり、一部の動物が各地から集められたほかは、動物標本は福建博物研究会、水産物は浙江省立水産学校、鉱物は浙江省礦産調査書がそれぞれ大多数を占めている。昆虫はすべて浙江省昆虫局から出品され、獐山動物標本及び獐民衣食器具はすべて広東中山大学のものである。植物は浙江大学農學院教授の鍾觀光らが臨時に本会のために天目山に行って採集したものである。

これらを省別に見れば、大半が浙江省からの出品であり、他は福建と広東からであるが、報告書にあるようにごく少数の特定の機関からの出品が中心である上、植物に至っては、大学教授個人が間に合わせて収集したようなものが中心となっていたのである。

また、西湖博覧会には「芸術館」が設置されており、文化的側面を窺わせるものであったが、その中に、おそらくは当会の目的の一つである「科学技術」の発展を表すべく、写真という近代的な技術を駆使した「照相館」なるものがあった。しかし、その内実たるや、以下の報告のごとくであった²⁶。

今回の照相館の参加者は甚だ少なく、ただ杭州の二我軒と英華、安徽の雲芳の3所からのみであった。出品には風景と人物、美術写真があったが、技術的な側面については言うべきものはなく、構図の上ではただ写実的撮影としての「写真」であると称せるものばかりであり、美術的撮影としての「写意」とは言えない。……アマチュア写真家の作品は200点あまりあったが、作者は常熟の楽社と少数の個人のほか、ほとんどすべて中国攝影学会の会員であった。楽社は場所が比較的辺鄙であり、それゆえ設備は上海の便利さに及ばず、よって会員数も少なく、出品も多くない。……中国攝影学会は上海にあるため、諸事に便利であり、会員も出品するものが多い。

これらの展示は芸術作品として博覧会に展示するに値するかどうかはともかく、機関としても個人

²⁵ 『中国早期博覧会資料彙編』6、「西湖博覧会博物館研究報告」、67頁、「查本館出品、其大別爲動物植物礦物三類、出品者以三數機關爲主幹、除一部分動物徵自各地外、動物標本則福建博物研究會、水産則浙江省立水産學校、礦物則浙江省礦産調査所、各佔大多數、昆蟲完全出自浙江省昆蟲局、獐山動物標本及獐民衣食器具完全爲廣東中山大學之物、植物係浙江大學農學院教授鍾觀光等臨時爲本會向天目山所採集」。

²⁶ 『中国早期博覧会資料彙編』6、「西湖博覧会芸術館美術研究報告」、428頁、「此次照相館參加者甚少、祇杭州之二我軒、英華、安徽之雲芳三家、出品有風景、人像及美術照相、就技能上言均無可議、在構圖上俱祇能稱爲紀事攝影的「寫眞」、而不能稱美術攝影的「寫意」、……業餘攝影家之作品、共二百餘點、作者除常熟樂社及少數個人外、幾全爲中國攝影學會會員、樂社地方較僻、設備自不及上海之便利、而會員人數較少、出品不多、……中國攝影學會地處上海、諸事便利、故會員多出品」。

としてもやはり浙江省を中心としていたことがわかる。

その他、報告書による総括が特に行われていないため、まとまった記述を見つけ出すのは困難であるが、大半の出品物が浙江・福建・広東の三省、特に浙江に偏重していることがわかる²⁷。

このような状況であったから、前項に見たように会場自体は拡大工事が進められたのだが、それを満たすための展示物はかえって得ることができなかった。このことはすでに報告書の序文においても記されているとおりである²⁸。

土地は広過ぎたが、展示物を置く場所は狭過ぎた。それゆえ会場の管理が容易でないばかりか、観覧客は奔走するのに骨を折り、しかしながら大して多くの物が見られるわけでもなかった。

ちなみに、この陸費逵による序文において、上記の点を含めて4つの失敗があるとしつつも、博覧会は半ば成功を収めたとしている。ただ、この評価の是非はさておき、興味深いのがその理由である²⁹。

今回の西湖博覧会は成功とも言えるが、失敗とも言える。一省一市の力を以て、このような博覧会を開催し、多くの記念物を残し、また湖畔や山地一帯を開発することもできた。100万円にも満たない費用でこれは大きな成功ではないだろうか。

西湖博覧会が一省の力であったということを誇ると同時に、博覧会をきっかけとして都市開発ができたことを率直に述べ、開催意義の前面に押し出しているのである。

また、西湖博覧会が一省の力であったことを南洋勸業会と比較して述べているものもあって、程振鈞による序文がそれである³⁰。

我が国では清末に初めて南洋勸業会を開催した。全国の力を挙げて行ったが、それでも当時参観した者には不満の声もあった。今回の西湖博覧会に至っては、国民政府によって掲げられ、各省市区がそれに従って協力したとはいえ、主宰したのはあくまで浙江省一省に過ぎなかった。その成績が博覧という名を負い、参観者の希望を満足させるのに足りないということは、十分に承知している。

ここに語られている西湖博覧会は、少なくともその運営体制においては、南洋勸業会に及ばなかったことがはっきりと述べられており、計画当初の展覧会の域を脱しないことも暗に認められているのである。

西湖博覧会の地方性という問題を考えるにあたって、最後に触れておきたい論点は、地方ごとのマスコミでのとりあげられ方である。この点については十分に考察できたわけではないのだが、上海の『民国日報』と『時報』、天津の『大公報』、北京の『順天時報』といった有力紙について調べ

²⁷ 『中国早期博覧会資料彙編』5～7所収、『西湖博覧会総報告書』を参照。

²⁸ 『中国早期博覧会資料彙編』5、37頁、「序（陸費逵）」、「地面太寥廓、容積太狭小、不但布置管理不易、觀衆很吃力的奔走、却看不见多少東西、後來再辦博覧會、於這幾點似乎應當特別注意」。

²⁹ 同上、「這次西湖博覧會可以說是成功、也可以說是失敗、以一省一市的力量、經營成這樣一個博覧會、並且留下許多紀念物、又把湖濱孤山一帶整理經營、而所費不到一百萬元、這是多麼大的成功啊」。

³⁰ 同上、41頁、「序（程振鈞）」、「吾國清季、創辦南洋勸業會、嘗舉全國之力以赴之、在當時觀者、已有不滿之詞、至此次西湖博覧會、雖得國民政府提挈於上、各省市區從旁協助、而主其事者、則僅浙江一省、其成績之不足以當博覧之盛名、矚觀衆之願望、本在意中」。

たところ、次のようであった。

即ち、『民国日報』と『時報』には、西湖博覧会の開幕日（民国 18（1929）年 6 月 6 日）には会長の張人傑と副会長の程振鈞の名義によって、「西湖博覧会が本日開幕しました。全国の同胞は早く参観に来て下さい。（西湖博覧会今日開幕了、全國同胞快快來参観呀）」という文句の広告が掲載されており、他にも「西湖博覧会本日開幕（西湖博覧会今日開幕）」という表題の記事などが見られたが、同日の『大公報』及び『順天時報』には、同様の記事が全く見当たらない上に、「全国の同胞」に呼び掛けたはずの会長・副会長の広告も掲載されていない。博覧会に関する記事は『順天時報』ではようやく 6 月 14 日になって初めて、開幕式について「参加者は総計 3 万人であった（参加者計三萬人）」³¹ という記事が掲載されたが、『大公報』に至ってはその後も全く見られなかった。そして、更に興味深いのが 6 月 8 日の『順天時報』にある「宋慶齡が西湖に休養に行く」という表題の以下の記事である³²。

南京からの 6 日の打電によると、孫夫人は上海に居るが、喧騒に耐えられず、西湖に閑静な場所を探して休養に行くそうであり、すでに人を派遣して家を探しているとのことである。状況から考えて、宋慶齡が西湖博覧会を参観に行くことになったのだろうと察せられるが、博覧会については全く触れないどころか、喧騒を避けて西湖に移るといった奇妙な理由まで付加して報道しているところに、北京での西湖博覧会に対する冷淡さが明白に表れているのではないだろうか。つまり、杭州以外の地方、特に北方では西湖博覧会は——そこに政治的な意図があるかどうかは定かではないが——全く取るに足らない催しだったのであり、そこから西湖博覧会の地方性と、南洋勸業会の「記憶」の薄さ、といった事実が如実に浮かび上がってくるのである。

結論

本稿では、清末の南洋勸業会に続いて民国期に行われた全国規模の博覧会である西湖博覧会に焦点を当てたが、なかでも西湖博覧会において南洋勸業会がどのように語られていたのか、という問題についてまず考察を行った。すると、従来提唱されていたような、前者が後者を「批判的に継承した」というような明確な関連は見ることができず、むしろ歴史的事実として以上の「記憶」を見出すことはできなかった。つまり、西湖博覧会開催当時において、南洋勸業会は深く刻み込まれた中国共通の「記憶」とはなっていないからである。

では、博覧会は中国において数少ない経験であり、重要な「記憶」になりえると思われるにもかかわらず、事実はなぜそうならなかったのだろうか。清朝と民国との関係をふまえると、あるいはそこには政治的・政策的な意図があるのかもしれないが、本稿では別の側面に着目して考察を行った。即ち、西湖博覧会は確かに形式的には全国規模の博覧会ではあったが、実質的には地方性が色濃く見られていた、という側面である。

³¹ 『順天時報』（民国 18 年 6 月 14 日）「西湖博覧会開幕禮誌略」。

³² 『順天時報』（民国 18 年 6 月 8 日）「宋慶齡擬赴西湖休養——不耐喧囂已赴杭覓屋」、「南京六日電、孫夫人在滬、因不耐喧囂、將赴西湖覓清靜地休養、已派人赴杭覓屋」。

西湖博覧会は計画当初、一地方の展覧会として始まり、後にやむを得ない事情で拡大することになったものである。企画自体は中央政府の支持は得ていたとはいえ、財政、運営や展示物の収集などほとんど浙江省のみで行われていた。それゆえ当然のことながら、浙江省の特色や利害が強く反映され、しかもそれを功績と考える向きすらあった。逆に他の地方にしても、それなりに出品のあった福建や広東などの南方はともかく、北京・天津といった北方の大都市では、新聞に大きくとりあげられることもなかった。要するに、西湖博覧会は浙江省という一地方の政策として行われていたのであって、このような意識に基づいている以上、そこでは南洋勸業会が中国共通の「記憶」として語られる必然性がなかったのである。

以上のような事柄が、政治的に分裂していた民国時代に特有のものなのか、あるいは実は伝統的に存在していた地方性——それは南洋勸業会にも確かに存在していた——の流れを汲むものなのかは定かではない。むしろ、これを「中国の博覧会」として「記憶」する歴史観は、中国をまとめた総体として見なす現代の見方に過ぎないのかもしれない。この点については、すでに本稿の範囲を超えるものであり、様々な角度から考えていかななくてはならないだろう。よって、本稿ではひとまず問題を提起するにとどめたい。

Memories of the Nanyang Exposition (南洋勸業会) as Expressed at the Xihu Exposition (西湖博覧会)

KOHADA Seiji

This paper is intended as an investigation of the Xihu exposition that was the second nationwide exposition held in 1929. At first, this paper focuses on how the Xihu exposition described the Nanyang exposition which was the first exposition held in 1910. Very little evidence is found to suggest that the latter succeeded the former in any critical way. In short, the Nanyang exposition hadn't become a significant memory for the Xihu exposition.

Although the Nanyang exposition could have become a significant memory, because few expositions were held in China, why didn't it? On the basis of the relation between the Qing dynasty and the Republic of China, there could have been some political reasons, but this paper is concerned with another point. That is to say, although the Xihu exposition was a nationwide scale exposition formally, we can find a lot of provincialism in it.

The Xihu exposition started as a local exhibition, and unwillingly expanded later. Plans were supported by the national government, but finance, administration, and collection of articles for exhibition were conducted by Zhejiang (浙江) province alone. Therefore, the exposition reflected features and interests of this province, and some local people considered this rather a merit. On the contrary, in other provinces like Beijing (北京) or Tianjin (天津), the event was not noticed at all. To sum up, the Xihu exposition was held as a regional event, so it was not necessary for the people who attended it to relate it to common memories of the Nanyang exposition.